

第3回「鳥取県幼児教育振興プログラム」の改訂に係る検討委員会（協議）まとめ

日 時 平成31年2月18日（月）

会 場 中部総合事務所205会議室

(1) 鳥取県幼児教育振興プログラム（案）及び参考事例について

章	区分	委員意見
	全体	○参考資料は、効果的なものとなるように選定や工夫を行うこと。 また、何をどう見取ってほしいのかを書くべきである。
第Ⅰ章	改訂の趣旨	○「鳥取県教育振興基本計画」とのつながりについて記載すること。
第Ⅱ章	鳥取県の現状	○「人口減少」の原因が「自己肯定感」が低いと読める。また、「ふるさと教育」を充実すれば解決するということでもない。書きぶりを修正すること。
第Ⅲ章 めざす 子どもの姿	1 遊びきる子ども	○「主体的な遊びを中心とした乳幼児期にふさわしい生活」の記述に、「年齢別の発達過程を丁寧に見ていくこと、遊びきる姿を丁寧に見ていくことが大切」と書き加えること。
	3 育ちと学びの 連続性	○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」については、到達目標ではない。心身の発達に応じて、指導を行う際に考慮すべきものであることやどう小学校に引き継ぐかを注意的に書く方がよい。
第Ⅳ章 推進の柱と 基本方針 及び目標	推進の柱1 幼児教育の質の向上	○認められた安心感や自己肯定感は、「褒めること」だけでもてるものではない。失敗した中で状態を受け止め、共感を得ながら、認められたり褒められたりする体験が大切である。就学前の自己肯定感の説明ができることよい。 →子どもが自己表現している姿を前向きに捉えて表現したい。 就学後・就学前の保育者・教職員が子どもに共感し、どんな認め方をするか検討したい。 ○海外から帰国した幼児や生活に必要な日本語の習得に困難のある幼児にどんな支援ができるかを記入した方がわかりやすい。子どもだけでなく、親への支援もこれからの課題ではないか。 →・相談センター（東・中・西部）の設置を紹介する。 ・幼稚園・認定こども園・保育所等の場合は施策が十分に整っていない現状がある。国も具体的な施策は出していない。 ・県教育委員会では保護者対応に向けた「学校生活ガイドブック」を8か国の言語で作成している。（ベトナム語版作成中）就学前版も検討していきたい。 ・小中学校においては、日本語指導支援員をおき、学習支援を実施している。 ○「学校生活ガイドブック」を基本に学校の状況に合わせて作り替えて活用している。園では、文書連絡を英語にして持ち帰らせた

		<p>こともある。支援員制度など、現場で個別対応できない時は、協力をお願いしたい。</p> <p>→市町村の役割でもあるため、働きかけていきたい。</p>
	<p>推進の柱2 保育者の資質向上</p>	<p>○保育者は、新規採用時・10年経験時などの節目研修以外に研修を受けていないのか。</p> <p>→新規採用者研修、10年経験者研修は法定研修。これ以外にも多くの研修を実施。分かりやすい研修一覧表を資料とする。</p> <p>○「教職員」という用語について、保育士、保育教諭等具体的に示した方がいいのではないか。園には看護師、栄養士等の職員もいるので「保育者等」としてはどうか。</p> <p>→研修に参加するのは保育者以外の職員も含まれるため、表現については整理する。</p> <p>○免許状の上進についてデータを載せる予定とあるが、県として認定講習など何かしらの対応を考えているか。</p> <p>→上進希望調査を実施中。調査結果から対応を検討する予定。それを踏まえ、プログラムに載せる資料を整理する。</p>
	<p>推進の柱3 小学校教育との連携・接続推進</p>	<p>○教育課程・全体的な計画とあるが、認定こども園が使用する要領では教育及び保育と示してあるので保育という文言を加えた方がよいのではないか。</p> <p>→保育所保育指針では、全体的な計画の中に教育及び保育が含まれている。</p>
	<p>推進の柱4 子育て・親育ち支援の充実</p>	<p>○保護者に提供する学びについて、子育ての困り感の解消に役立つ幅広い内容を提供していく必要がある。(例) 就学援助、虐待、発達に関することなど</p> <p>→研修内容や情報提供の内容として例示する。</p> <p>○日本語支援の必要な保護者へ、園では、英語の堪能な保護者やボランティアの協力を得るなどして対応している。県としての取組も示した方がよい。</p>
	<p>推進の柱5 地域とともにある幼児教育の推進</p>	<p>○これからの時代には、地域の力が期待される。地域での人間関係・ネットワークづくりが重要である。</p>
<p>第V章 鳥取県幼児教育センターの役割と活用</p>		<p>*特になし</p>

(2) 保護者支援の現状と今後の取組について

《関係機関との連携》

- ・子どもの成長・生命にかかわる現状の家庭への関わりについて考えていくことが必要であ

る。難しい現状の中で、保育者だけに対応を求めることは困難であり、児童相談所、警察等との連携が求められる。

- ・子どもに無関心な親と熱心な親と二極化が進んできている。対応の難しい家庭への支援は学校だけでは困難な場合がある。また、大勢の人との関わりに不安を感じる「**Highly Sensitive Person** ひといちばい敏感な子」と言われる児童も認識されるようになってきている。園や学校だけでは対応が難しい場合、関係機関との連携が重要である。

《保護者の学びの機会》

- ・保護者の研修会は生活習慣に関わることで記載されている。不適切な関わり方は、家庭や保育の中にもあるのでないか。命に係わるだけでなく、その前段階についても学ぶ機会が必要。
- ・児童養護施設や乳児院といった施設があることを知らない保育者がいる。虐待の実態も知らない。親の背景を読み取っていく機会が必要。園にとっても保護者にとっても学びの機会を設けることが求められる。
- ・研修に来ない保護者への関りとして、地域の力を借りたい。地域で子どもを見守るネットワークづくりが急務である。
- ・「育てられたように育つ」というが、親になった時に虐待しないように関わり、保護者を「受容」していくことが重要。

(3) 鳥取県幼児教育振興プログラムのサブタイトルについて

- ・「0歳」「乳幼児」という言葉を入れることで対象がはっきりとし、鳥取県が0歳からの教育を大切にしているという思いが伝わる。
- ・「未来」という将来へつながる言葉を入れたい。
- ・「学び」を勉強と捉えられないように、「学び」と「育ち」は、セットで使いたい。
- ・「遊びの中の学び」「生きる力」が、プログラムの内容を示す大事な言葉だと感じる。
- ・小学校でのプログラム活用率の低さを踏まえ、「小学校」という言葉を入れて小学校職員への意識付けを図りたい。

→鳥取では、乳児を含めた教育を大切にしてきた。「0歳」「小学校」という言葉を使わなくても、鳥取らしさ、鳥取県が大切にしてきた思いが伝わるサブタイトルを考え、第4回で示したい。